

史料紹介 「甲斐国窪八幡別当上之坊文書」について

上之坊文書研究会

根 岸 茂 夫

山梨県山梨市の笛吹川沿いに鎮座する大井俣窪八幡神社は、貞観元年（八五九）に清和天皇の勅願により宇佐八幡宮を勧請したと伝えられる延喜式内社であり、のち窪八幡とも称せられた。中世には武田氏の崇敬が厚く、戦国期に甲斐の国中地域の神社が義務づけられていた府中八幡への勤番を免除されるなど、さまざまな武田氏の庇護を受けた。現存する国指定重要文化財の本殿など、社殿の多くも、この時期に寄進されたものである。天正十年（一五八二）、武田氏を滅ぼした織田信長によって、社領が没収されたが、同年甲斐を領した徳川家康が、翌十一年に社領二〇〇貫文を寄進し、慶長二年（一五九七）浅野長政が二〇〇俵を寄進した。のち寛永十九年、徳川家光の朱印状により、鎮座する山梨郡万力筋八幡北村のうちに、二七〇石五斗余の社領が安堵された。この朱印高は甲斐国内第一であり、窪八幡の格式の高さを物語るものである。

朱印二七〇石余は、本宮修復料六九石余、摂社修復料四石余、大宮司分四三石余、社家分六〇石余、別当上之坊分三九石余、社僧分五三石余に配分されており、大宮司鶴田氏の下に社家二二家・巫女四家・神人八家があり、別当上之坊の下に社僧六坊・修験五坊がいた。近世の窪八幡では、社中には、大宮司と社家、別当上之坊と社僧が対置するような構成となっており、大宮司の方が若干所領が多いものの、近世前期には上之坊が大宮司より勢力を保持していた様子である。

別当の上之坊は八幡山普賢寺とも称し、新義真言宗醍醐報恩院の末寺で、窪八幡と同じく八幡北村にあり、鎌倉時代の建仁元年（一一二〇）に武田信光が創建したという。近世には境内除地一四二〇坪、本堂が一〇間に七間、本尊は普賢菩薩、庫裏を持ち惣門を構えてい

たという。上之坊の名は、戦国から近世初期に代々の住僧が書き継いだ『王代記』の存在によって、戦国史の研究では名高い。同書は、文化十一年（一八一四）成立の『甲斐国誌』にも引用され、武田氏研究の貴重な史料として、現在山梨県文化財に指定されており、『影印甲斐戦国史料叢書』の一冊として刊行されている。

本稿で紹介するのは、上之坊の旧蔵史料であり、現在國學院大學図書館が所蔵しているものである。流出の経緯は不明であるが、上之坊は神仏分離で廃寺となり、住持は明治二年（一八六九）復飾して里見氏を名乗り、のち血統が絶えたといわれるので（『王代記』解説）、あるいはそのような事情によるものかもしれない。図書館では古書肆を通じて受入れたが、このとき史料は、木製漆塗りの一箱に納められていた。箱は上蓋付きで、本体が八五・三×二一・七センチメートル、高さ二三・二センチメートル、上蓋が八七・八×二四・五センチメートル、高さ八・五センチメートルである。史料は現在整理中であるが、近世史料一九九点、他に明治期の史料が約一〇〇点存する。ただ、この史料群が、近代まで上之坊に所蔵されていた史料すべてか否かは不明である。

この史料の特徴の第一は、近世初頭の文書を含むことである。『甲斐国誌』には、窪八幡所蔵の古文書として一五点の目録を掲げているが、昭和三十七年（一九六二）刊行の『新編甲州古文書』一卷には、うち七点が不明とされていた。本史料群のなかには、所在不明とされていた文書のうち三点が含まれている。なお、文書は上之坊と大宮司が隔月交代で管理していたという。第二に、近世前期の史料は、所領や土地に関する内容が多いが、元禄期以降には、社家・社僧の座論勤役にかかわる史料が目につき、天明期以降には、窪八幡との関係を示す史料が少なくなり、上之坊の末寺支配や祠堂金貸付など寺務の史料がほとんどを占めることである。一方で、大宮司側が次第に勢力を増し、しばしば出入を繰り返しながら、別当上之坊を社務から疎外していく傾向が見られる。さらに近代以降の史料は、里見家の家計にかかわるものが大半となっている。

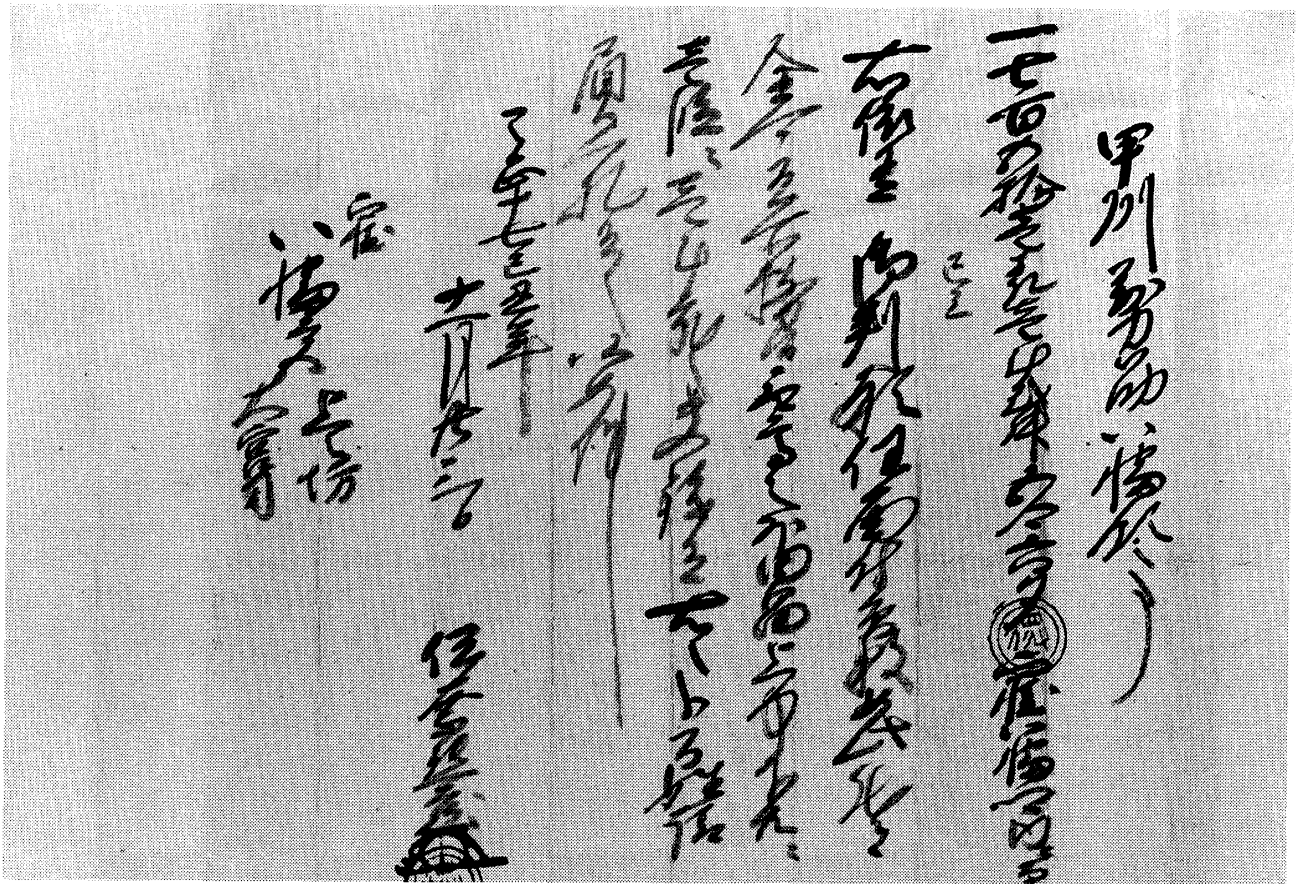
本稿では、紙幅の都合から、近世初頭から前期の史料の一部を掲げたが、若干の解説を加えておく。

1～3は、『新編甲州古文書』に伝存しないとされ、今回確認できた史料である。1は、天正十七年に徳川家康の代官頭伊奈熊蔵忠次が発給した社領寄進状である。伊奈の花押と印判が捺されているが、この花押は木版である。2は、加藤光泰の代官植田英存寄進状である。1・2とも、包紙には朱書で「ハ一番」などと注記され、所蔵史料の整理のあとが見られるが、整理の詳細や時期などは不明である。3は、社領を安堵した徳川氏の代官頭大久保長安の書状である。年号がないが、長安が石見守に叙任したのが慶長八年であり、内容から慶長六年から八年の間のものであろう。

4は、慶長五年の浅野長政禁制の写しであるが、甲府城主浅野の家臣が境内で狼藉を働いたのであるうか。5は、罪を蒙り甲府で蟄居していた甲府城主徳川忠長が、父の大御所秀忠の平癒を祈った願文である。秀忠は翌寛永九年正月に死去し、忠長も同十年に兄家光によって自害を強いられた。本書は、包紙は大高檀紙であり、あるいは原文書とも思われるが、本紙は紙質の異なる美濃紙であり、写しのようである。6は、隣村市川村の稲荷大明神を窪八幡の末社としたもの、7は、窪八幡の社領の配分であり、詳細が判明する。捺印が朱印であるが、印文や誰のものは不明である。おそらく社中の捺印であろう。8は、宮職などの売買の禁止を議定したものであるが、家職とともに配分された社領の一部が売買されたためであろう。9は、寺社奉行に提出した社法定書で、朱印や文書を別当と大宮司が一年交替で管理し、両者が社務を総括しているさまが窺える。10は、検地の節に鳥居を建てる場所を除地に願ったもの。11は、上之坊と大宮司の勤め方であり、上之坊が御神体を護持し本殿内陣の鑑を管理している。

12・14は、6のうちの市川村の稲荷大明神の所屬をめぐる出入や山境出入に関するもの。15は、元禄の国絵図作成のときの調査で、社中所領の配分や社家・社僧の明細を記している。16・17は、元禄十五年（一七〇二）社家の座論について寺社奉行の裁許をうけたさいの、訴訟方・相手方の請書であり、両者とも処罰をうけている。18は、この出入に際して提出された餅重の祭礼時の座席図である。『窪八幡神社誌』には、通常の祭礼の座順図が掲載されているが、このような出入を通して、社家・社僧の座席や格式が再確認され、文書化されていったさまを窺うことができよう。この図でも、上之坊が本社を背にして正面中央に位置しており、大宮司との格差を確認できよう。のち十八世紀以降に、大宮司が次第に勢力を強め、別当上之坊が社務から疎外されていくが、この点をはじめ近世中後期の問題の検討は別の機会を俟ちたい。

なお、翻刻に当たっては、表題の下に「」で整理番号を付し、編者の注記を（ ）で、朱書を『』で示した。



1. 天正17年11月 窪八幡領安堵ニ付伊奈忠次書出

1 天正十七年十一月 窪八幡領安堵ニ付伊奈忠次書出

(豎紙) (二)

(包紙上書)
二八一番

天正十七年十一月七日 社領配当附

甲州万力筋八幡領之事

一七百五拾壹表壹斗式升五合六勺⑩ 窪八幡郷内二而

已上

右依有 御判形、任面付員数如此、然者全可有所務候、取高之外田畑上中下共二壹段二壹斗宛候、夫錢者右之分百姓請負一札有之、仍如件

天正十七己丑年

十一月廿三日

伊奈熊藏(花押)⑩

窪 八幡宮 上之坊

大宮司

(本書の花押は木版である)

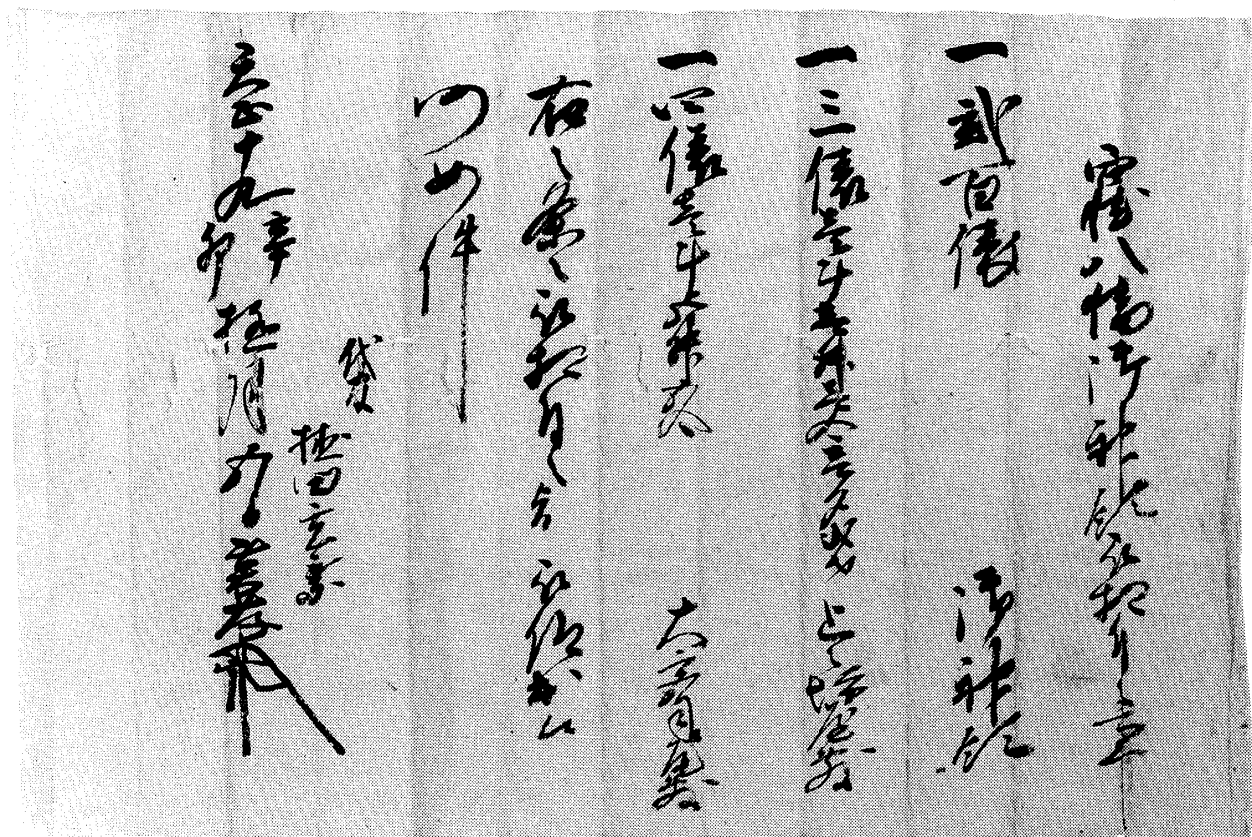
2 天正十九年十二月 窪八幡神領配分ニ付植田英存書出

(豎紙) (三)

(包紙上書)
二八四番

一八五番

天正十九年卯十一月 同年極月御代官植田



2. 天正 19 年 12 月 窪八幡神領配分ニ付植田英存書出

御神領并両司坊中 玄蕃の御証文 式通入
屋敷地御寄附之御書 出し

窪八幡御神領被相付之事

一式百俵

御神領

一三俵壹斗壹升壹合壹勺式才

上之坊屋敷

一四俵壹斗五升五合

大宮司屋敷

右之条々被相付之旨被仰出候、仍如件

代官 植田玄蕃

天正十九 辛卯 極月五日

英存 (花押)

(八四番の史料は包紙中になし)

3 窪八幡神領安堵ニ付大久保長安書状 (折紙) (三)

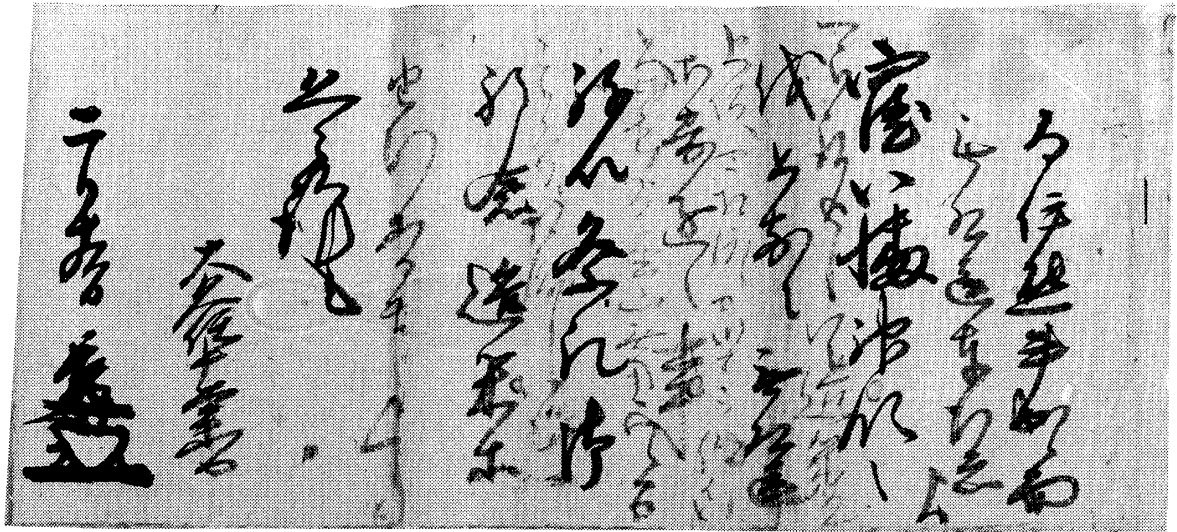
尚、伊熊書出候面、無相違奉行衆の可被取返候、以上、^(後筆力)造米
めん上坊へ可相渡候由御意被 仰付候、当年の松山無用二其
方二相渡候、以上」

窪八幡神領之儀、如前々無相違、御寄進之事候間、弥以祭礼・御
祈念造米等由断あるましく候、恐々謹言

大久保十兵衛尉

二月十九日

長安 (花押)



3. 窪八幡神領安堵ニ付大久保長安書状

窪八幡之

別当

(本書、宛名の一行が切取られた疑いあり)

4 正徳四年二月 慶長五年浅野弾正禁制写 (続紙)

(二二二)

(包紙上書)
「八十二番」

慶長五年三月六日

浅野弾正殿に被下置候制札之写、両司印アリ

但、正徳四年之写ニ候

一通

(端裏書)

定

(貼紙)
「上之坊所持」

一 殺生禁断之事

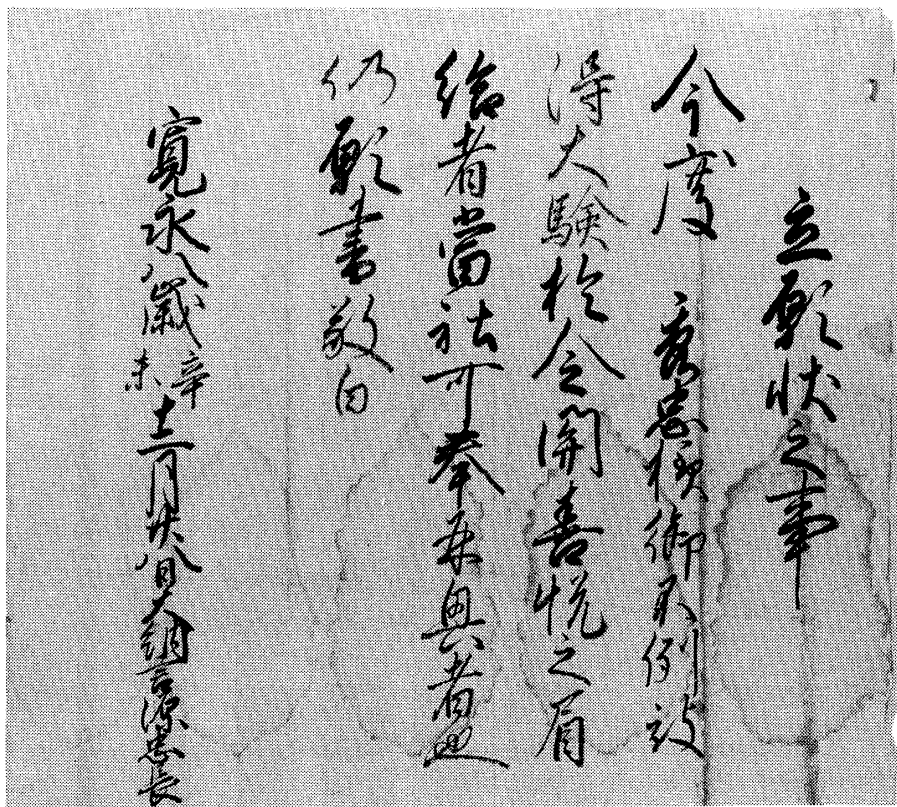
一 社頭伐取竹木 付、狼藉之事

一 社僧社人江不届撞鐘事

右条々堅令停止訖、若違犯之輩於有之者可為曲事者也、仍如件

慶長五年三月六日 長 政判

右之通浅野弾正殿に被下置所持仕罷有候得共、社中等二建来不申候、則写差上申候、以上



5. 寛永8年12月 秀忠平癒ニ付徳川忠長立願状

山城國醍醐報恩院末寺

甲斐国山梨郡窪八幡村

正德四甲午年二月十日

八幡宮別当

真言新義

上之坊印

同所大宮司

鶴田主膳印

5 寛永八年十二月 秀忠平癒二付徳川忠長立願状（竪紙）

四

（包紙上書）

「甲斐国山梨郡八幡村」

普賢寺等範

御房

大納言

立願狀之事

今度秀忠様御不例被得大駿、於令開喜悅之眉給者、当社可奉再興者也、仍願書敬白

寛永八歲 辛卯十二月廿八日 大納言源忠長

(本書、包紙は大高檀紙なるも本紙は美濃紙)

6 寛永六年四月

市河村稻荷大明神之儀八幡宮末社二付
奉公之旨手形（豎紙）〔五〕

（包紙上書）
『八廿一番』

寛永六卯月十日 市川村役人等之証文
彼村稻荷社之義二付

市河村稻荷大明神前々より八幡宮末社まきれ無御座候、各々御訴
詔二付而彼之宮所へ少も無御無沙汰御奉公可申上候、為後日手形仍
如件

寛永六年

巳ノ卯月十日

八幡宮

市川

久左衛門印

上万力

勘右衛門印

同

五左衛門印

大工村

太兵衛印

同

権右衛門印

堀内

小右衛門印

市川

三右衛門印

左太夫

印

馬場

猪右衛門印

7 窪八幡宮供祭料渡分并社家配分覺（続紙）〔六〕

（端裏書）
「寛永十一甲」（破損）
「」

八幡「」（破損）
「神領」（破損）
「」

（破損）
「七百五拾壹俵一斗貳升六合」

此石 貳百七拾石四斗貳升六合也

右之内

（朱印、以下同）
一 ①三拾貳俵一斗六升六合 ①
昔ヨリ本願分
但

觀照院

此石拾壹石六斗八升六合

一 ①「」（破損）
「三拾貳俵」
供僧社人納之

御供三拾度二納

此石四拾七石五斗貳升

一 ①百拾八俵一斗六升 ①
供僧社人納之

祭廿七度二納

此石四拾貳石六斗四升

一 ①百五俵 ①

供僧衆 十一人御恩
承仕共二

此石三拾七石八斗

一 ①四拾俵八升 ①
於神前
供僧衆

御祈祷役錢

此石拾四石四斗八升

一 ①貳拾四俵一斗六升 ①

社人衆 十九人
散仕共

此石八石八斗

一 ①拾八俵 ①

市三人神樂衆共二

此石六石四斗八升

一 ④四拾俵④	内式石八升 会式祭二社人へ出	御供屋江納ノ分	散仕免 但さい燈共二
此石拾四石四斗			
一 ④拾俵一斗式升④	御神前	燈明三燈	
此石三石七斗式升			
一 ④式拾貳俵④	内式斗八升社人へ渡ス 大宮司江	三月七日 会式祭六坊衆	
此石七石九斗式升			
一 ④七俵四升④		おさき打めん やぶさめめん おかや馬引めん共二	
此石式石五斗六升			
一 ④式拾俵④		番匠 大工 小工	
此石七石式斗		鍛冶免	
一 ④四俵④			
此石壹石四斗四升		獅々舞	
一 ④貳俵④			
此石七斗式升		御修理免	
一 ④八拾五俵一斗式升④			
此石三拾石七斗式升	御恩分	大宮司	
一 ④四拾五俵④			
此石拾六石式斗	御恩分	上ノ坊	
一 ④四拾五俵④			
此石拾六石式斗			
御供祭御恩方取合渡分			
一 ④四石七斗七升四合四勺④	内三斗六升道師めん	浄龍坊	
一 ④六石七斗六升八合④		窪之坊	
一 ④三石六斗④		中之坊	
一 ④三石六斗④		常樂坊	
一 ④貳石七斗三升六合④		弥勒坊	
一 ④三石貳升四合④		惣之坊	
一 ④貳石四斗四升八合④		仙光坊	
一 ④三石九升六合④	内三斗六升道師めん	北之坊	
一 ④七石五斗六升④		東之坊	
一 ④拾石貳斗壹合六夕④	散在燈明共二	不動坊	
一 ④四石五升④		池之坊	
一 ④壹石五斗八升三合④		承仕免	
一 ④拾三石三斗貳升④	諸役義共二	宮代官	
一 ④拾五石三斗④	同	平右衛門	
一 ④三斗九升六合④	さいとう共二	小兵衛	
一 ④壹石八斗七升貳合④		吉左衛門	
一 ④三石四斗五升六合④		市兵へ	
一 ④貳石三斗九升四合④	馬引共二	宮内左衛門	
一 ④四石貳斗六升貳合四夕④	役錢共二 やぶさ共二	勘左衛門	
一 ④壹石八斗七升貳合④	南村	治左衛門	
一 ④三石四斗五升六合④		与右衛門	
一 ④貳石貳斗六升八合④		庄「」	

一 卍壹石七斗六升四合 卍	役錢共二	式部少
一 卍貳石三斗九升壹合 卍	高引兩人共二	四郎兵衛
一 卍伍斗壹升九合三夕 卍		宮勤「」
一 卍七斗四升七合三夕 卍		獅々免
一 卍四斗六升八合 卍	(後筆)	治部
一 卍貳石八斗八合 卍	『明治十五年第一千三百七号 甲府始審裁判所明治十六年 三月二十六日閣』	理右衛門
一 卍壹石四斗四升 卍		鍛冶免
一 卍壹石八斗七升貳合 卍		忠兵へ
一 卍七石貳斗 卍		番匠免
一 卍壹石三斗 卍		市おなへ
一 卍壹石三斗 卍		市かの川
一 卍壹石三斗 卍		市八ッ殿
一 卍五斗壹升七合 卍		白幡
一 卍七石六斗三升六合 卍	三月七日 六坊二面祭	会式祭
一 卍四石三斗貳升 卍	十二月十二日勤候 盆共面付次第也	修正御祈念
一 卍四石三斗貳升 卍	是モ十二坊 但面付上坊	放生会勤
一 卍五石一斗貳升 卍	是八東坊ト 兩人にて上坊取	法則免
一 卍拾三石四斗四升 卍	口分 本願坊	觀照院
一 卍三拾石七斗貳升 卍		御修理免
一 卍四拾貳石貳斗七升貳合 卍	御供祭共	大宮司
一 卍三拾九石四斗五升四合 卍	御供祭御恩役共	上之坊
都合貳百七拾石四斗貳升六合也		

8 寛永十四年 宮職并御供祭売買禁止、社役精勤二付坊

中社人議定書(続紙)(七)

(端裏貼紙)

「寛永拾四丑年坊社神務連印議定書」

(端裏)

「並」

一 宮職并二御供祭売買二仕間敷候事、同一職前之内御供祭り之所、
一合成其他之子供二別出し申間敷候、其跡を次御奉公仕者二急
度相渡し可申候、然共二職候ハ、二人にて可申付候事
一 於御神前二天下之御祈禱・恒例之勤、神事祭例・宮籠・宮役并
二掃地番等無油断相勤可申候、次二社中竹木恣ニ一本成共きり
とり申間敷候事

右之条々堅相定申候、若是相背輩ヲハ中間よりせんき仕、兩務江致
披露、以御相談其職ヲおさい取て別人ニ急度可申付候、此御法度
非ス他之為ニハ、各々為二身候間、何れも如此一札仕進之候、為
後日一札仍如件

寛永拾四年 丑丁

次第不同

坊中	中之坊 卍	窪之坊 卍	不同坊 卍
	浄龍坊 卍	北之坊 卍	仙光坊 卍
	惣之坊 卍	池之坊 卍	弥勒坊 卍
			社人衆 卍

常樂坊[㊦] 東之坊[㊦] 甚右衛門[㊦]
 社人 権大宮寺[㊦] 宮代官[㊦] 新九郎[㊦]

兵四郎[㊦] 平右衛門尉[㊦] 喜右衛門尉[㊦]
 与右衛門尉[㊦] 勘左衛門尉[㊦] 庄左衛門尉[㊦]

猪右衛門尉[㊦] 喜兵へ[㊦] 源左衛門尉[㊦]

内 蔵[㊦] 与 助[㊦] 弥左衛門尉[㊦]

新七郎[㊦] 治左衛門尉[㊦] 六右衛門尉[㊦]

若宮衆 別 当[㊦] 茂兵へ[㊦] 加兵へ[㊦]

理左衛門尉[㊦] 大 蔵[㊦] 御 市[㊦]

坊中 加の川市[㊦] 市おなへ[㊦] 八 市[㊦]

9 寛文七年九月 窪八幡社法定書（続紙）〔八〕

（端裏書）

（貼紙）

「寛文七年」

社法定書

「

一 御朱印者別当・大宮司一年替所持可仕事

一 修理料之儀別当・大宮司双方致支配以談合万事可仕事

一 社中竹木之儀社頭之用二候者、別当大宮司以談合伐採可遣之、

自分之用所二伐取申間敷事

一番帳二不載社人立申間敷事

一つふれ候社人并坊中如先規可相立事

一 社中樹木を不可植、杉・桧・松・桜等可植事

但、社人坊中屋敷之内二ハ樹木も不苦事

付、唯今有之樹木者別当・大宮司以談合等分可仕事

一 普賢堂者別当可為支配事

一番帳者、慶長九年辰十二月十三日之通可用之事

一 社領配当者慶安五年辰七月十九日別当・大宮司両判可為如帳面

之事

右之通堅相守可申候、此外之儀万事如先規可仕候、為後日依如件

寛文七年^{丁未}九月廿七日

甲州窪八幡

別 当[㊦]

同所

大宮司[㊦]

寺社御奉行所

10 貞享元年三月 検地之節鳥居場切添間数御除願（竪

紙）〔九〕

（包紙上書）

「貞享元子年

三月 鳥居場切添願書

「両司印アリ」

口上書之事

一 長九間^四
よこ三間 平ノ 喜兵衛屋敷添

一 長九間
よこ三間半 平ノ 長九間 平ノ 仁右衛門屋敷添

一 長九間
よこ三間 平ノ 藤右衛門屋敷添

一 長九間
よこ三間半 平ノ 忠右衛門屋敷添

一 長九間
よこ四間 平ノ 伝右衛門抱屋敷添芝間之所

一 長九間
よこ三間 平ノ 次郎兵衛屋敷添

右六人之内へ五人ハ連々と屋敷之内へ八幡宮鳥居場ヲ切添申候、
伝右衛門儀ハ芝間ニ而指置支配仕候、右鳥居場ヲせはめ申候所紛無
御座候得共、私共内々ニ而可仕様も無御座、鳥居場ハせはまり申二
付、鳥居立可申様も無御座延引仕候、今度之御検地ニ右間敷之通
御除キ被下候者、早々鳥居立可申間、願之通被仰付可被下候以上

貞享元子年三月

八幡北村

上之坊⑨

大宮司⑨

11 (貞享3年) 寅七月 窪八幡宮大宮司勤方覚 (豎紙)

(二〇一二)

(端裏貼紙)

「貞享年中

御書下と申伝候

寅七月

覚

一 窪八幡迂宮之節神体者上之坊奉守、御幣者大宮司可執行事

一 本社内陳之鑑上之坊預り、外之鑑者大宮司可為支配事

一 年中御供如前々大宮司可備事

一 大般若心經等者上之坊、転読之中臣被者大宮司相勤之由、双方

申之間、弥自今以後も可為其通事

一 八月放生会之時、御輿守出し、又者御供神明等之役儀、如先規

神主方ニ而可相勤事

以上

寅七月廿七日

12 山境道作二付手形 (豎紙) (二〇一二)

手形之事

一 貴僧様御山すそニ而山境悪敷御座候二付、皆々御扱ニ而西之道
切ニ今度申請候、然上ハ論所之場所境之道悪敷罷成候ハ、堀

之古道成共御勝手次第御作り御通可被成候、為後日証人立一札
如此二御座候、以上

市川村

茂右衛門[㊤]

証人同所

貞享四卯年

清水寺[㊤]

十一月

伊右衛門[㊤]

惣兵衛[㊤]

上之坊様

13

貞享五年三月 八幡北村稻荷社中出入取扱二付一札

(豎紙)「一〇—三」

指上ヶ申一札之事

一八幡上之坊・大宮司と市川村次右衛門、同所稻荷社中出入之儀、
内々ニて拙者共取扱相済申候上ハ、双方共ニ此儀ニ付、以来御
訴詔申上間敷候、為後日之上之坊・大宮司并次右衛門・市川村
名主・長百姓連判ニて一札差上ヶ申候以上

貞享五辰年三月十六日

八幡北村

上之坊

大宮司

御代官所

市川村

次右衛門

同所名主

文右衛門

長百姓

利兵衛

14

貞享五年三月 八幡宮末社文殊堂修理出入内済二付一札

(豎紙)「一〇—四」

(くくり紐付紙)

「市河村山道境 此書
并文殊稻荷等 入用
天保十一子年山主見ル」

(端裏書)

貞享五年市川村文殊堂二付村役人^ハ連印

一札之事

一今度八幡宮末社文殊堂修理被成候二付出入仕候所、当村御年寄
衆御異見被成候ニ付、自今以後文殊堂社中ニ拙者少も講^(構)無御座
候、此上ハ村中一同之御相談可仕候、為後日手形以如件

万力筋市川村

貞享五辰年三月

次右衛門[㊤]

同村名主

文右衛門[㊤]

同断

利右衛門[㊤]

長百姓

猪右衛門[㊤]

上之坊様
大宮司様

同 六右衛門[㊟]
同 太右衛門[㊟]
同 惣兵衛[㊟]
同 利兵衛[㊟]
同 武右衛門[㊟]
同 仁兵衛[㊟]

一同上之坊四拾三石并境内「^{〔貼紙〕}四百廿」坪御座候
一同大宮司四拾三石并屋敷三百五拾坪御座候
一同坊中領五拾壹石式升四合御座候
一同社人神子并獅子鍛冶番匠領共二七拾七石三斗式升五合四升五合所領仕候
右之外八幡宮末社
一甲府様御領分之内山梨郡万力筋江曾原村伊勢神領壹石四斗四升并社中八拾八坪御座候

当村

15 元禄十一年正月 八幡宮領国絵図御奉行所へ差上申候

控（豎帳）「一二」

（表紙）

元禄十一寅正月

八幡宮領

国絵図御奉行へ差上申候扣

上之坊

一甲斐国山梨郡八幡北村八幡宮領式百七拾石五斗八升余、社中三千坪并於社領之内正保式年^酉年以来相変候所無御座候
一坊中十二坊・社人十九人・神樂男四人・神子四人御座候、此面々旧例之御祈禱祭礼之役義相勤申候
一御朱印之内修理領五拾六石式斗三升壹合御座候

一甲府様御領分之内山梨郡万力筋大工村天神領六石式斗式升并社中三百坪御座候

神主
内蔵助[㊟]

大工村

神主
周防守

一駒井次郎左衛門殿・神谷与七郎殿相御知行之内、山梨郡栗原筋西後屋敷之内豊後村獅子宮社中百拾坪御座候

豊後村

獅子守
豊後大夫[㊟]

坊中之外上之坊末寺

一甲府様御領分之内^{山梨郡万力筋八幡北村}当村瑞翁院境内百式拾四坪御座候

当村

瑞翁院[㊦]

一 甲府様御領分之内山梨郡万力筋市川村岩清水領九斗井境内六百七拾式坪御座候

市川村

清水寺

一 甲府様御領分之内山梨郡万力筋^{市川村}配地文殊堂境内百五拾坪御座候

候

市川村

堂寺

文殊坊[㊦]

右之趣正徳式年酉ノ年以来相変候儀無御座候、仍為後証如件

醍醐報恩院末寺

真言宗新儀

別当

上之坊

神主

大宮司

元禄十一寅年正月

山城国宕愛郡醍醐

報恩院末寺

別当

上之坊

神注

大宮司

年号月日

右之通相違無御座候、以上

坊中

拾石式斗壹合

不動坊[㊦]

三石式升四合

宗坊[㊦]

三石六斗

中之坊[㊦]

式石七斗三升六合

浄龍坊[㊦]

式石四斗四升八合

仙光坊[㊦]

四石三升式合

池之坊[㊦]

六石七斗六升八合

窪之坊[㊦]

七石五斗六升

東之坊[㊦]

式石七斗三升六合

北之坊[㊦]

式石七斗三升六合

弥勒坊[㊦]

三石六斗

常東坊[㊦]

壹石五斗八升三合

住使[㊦]

社人

拾三石三斗式升

九左衛門[㊦]

五石壹斗

甚右衛門[㊦]

五石壹斗

平右衛門[㊦]

五石壹斗

次兵衛[㊦]

三斗九升六合

次左衛門[㊦]

壹石八斗七升式合

七郎右衛門[㊦]

式石三斗九升四合

与五右衛門[㊦]

四石式斗六升式合

伝兵衛[㊦]

三石四斗五升六合	權兵衛 ^印
貳石貳斗六升八合	兵左衛門 ^印
壹石七斗六升四合	内藏之助 ^印
貳石三斗九升四合	半之丞 ^印
五斗壹升九合	喜左衛門 ^印
四斗六升八合	治部
貳斗八升八合	六兵衛 ^印
壹石八斗七升貳合	理兵衛 ^印
壹斗貳升	太左衛門 ^印
壹石五斗	周坊守
五斗壹升七合	弥次右衛門 ^印
貳石三斗	志摩 ^印
貳石貳斗	彦三郎 ^印
	散使 ^印
神子	
三石四斗五升六合	大神子 ^印
壹石三斗	おなへ神子 ^印
壹石三斗	八乙女 ^印
七斗四升七合	神内河神子 ^印
壹石四斗四升	獅子領 ^印
七石貳斗	鍛冶役源太
	番匠役源五兵衛

以上

羽太清左右衛門殿
奥山作左右衛門殿
関新助殿

16 元禄十五年九月 窪八幡宮社家着座出入裁許請書 (続

紙)(二五)

差上申一札之^(事)

於窪八幡去八月放生会執行社家参籠仕候、私義八幡末社大工村天神神主二而高六石貳斗余之御朱印頂戴、且亦八幡神領を^茂配分仕候、勿論旧例二而八幡之祭礼不限大小其度々罷出、御内陳之役儀相務候付、此度^茂社家一統二御供所江相詰候処二、至九日社家羈田孫四郎与及座論妨祭礼候段、神主羈田内膳申上候付、双方被召呼於御評席被遂御僉議候処、私家筋代々社家之為上座之処、孫四郎親權左衛門与申者先大宮司内記末子二而候故、神主之權柄二而上座二差置申候、右權左衛門儀去々年相果、孫四郎代替当年初而出席仕候、惣而坊中并修驗祭礼之節着座、出世次第座を改申社法候故、私義^茂吉田之許状申請候上八旁以能時節与奉存、座を可改旨申募候段私申上候付、重々御吟味被遊候処、先祖上座仕候証拠不分明候処、神主二^茂不相達任我意押而着座仕候段、理不尽之仕形不届二思召候旨御尤至極二奉存候、依之急度可被仰付候得共、以御宥免於在所

逼塞可仕之旨被 仰渡難有奉畏候、尤向後有来ノ通下座二着可仕候、且对孫四郎仇ケ間敷義仕候者何分之越度二茂可被 仰付候、仍証文如件

元禄十五年^{壬午}九月廿七日

甲州山梨郡八幡村窪八幡末社
同国同郡大工村天神之神主

有賀周防印

寺社
御奉行所

右周防二被 仰渡候趣奉承知候、依之奥判仕候以上

窪八幡神主

霧田内膳

17 元禄十五年九月 神主・社家出入二付裁許請証文(続紙)(一六)

差上申一札之事

窪八幡祭礼如例年去ル八月八日同十四日迄社家参籠、放生会執行仕候、大工村天神之神主有賀周防是亦八幡之社役相勤候故社参仕候処、至九日周防義先達而御供所江相詰、私之定座を奪罷在候故、推参成儀与奉存及口論候、神主取暖候ハ、座論者追而沙汰可仕候間、当日之役儀仕候様ニ与申聞候得共不相鎮候段被聞召、双方於御評席

被遂御札明候、私申上候者、座論追而沙汰可仕与存候ハ、御供所江之出席双方差押可申儀候処、周防卒忽之致形をハ不相咎、私江者当日之役儀申付候段難心得相用不申候、往古八幡御内陳之役相勤候社人大工村二罷在候処、四拾年以前家致断滅候付、末社之神主周防二其職為相務候之由及承候、私義者祖父内記讓状二若宮別当与書載候、右由緒を以父権左衛門代ハ上座仕来候、神主内膳周防二荷担仕、私江非分申掛候、寛文七^{丁未}年別当神主出入之節、先御奉行御裁許之趣不相守不埒有之候段申上候付、重々被遂御論議候処二、若宮別当之証拠不正候得共、親権左衛門上座仕候段紛無之付、有来通向後上座二着可仕旨被 仰渡難有奉存候、此度之諍論神主申聞候趣不相用祭礼を妨、剩内膳江对難題申懸、我俣之仕形不届至極思召候得共、以御宥免於在所閉門被 仰付候、急度塾居仕可罷在之旨奉畏候、勿論万端神主下知違背仕間敷候、此旨相背候ハ、何分之越度二茂可被 仰付候、為後日仍証文如件

元禄十五年^{壬午}九月廿七日

甲州山梨郡八幡村窪八幡社家
霧田孫四郎印

寺社
御奉行所

右孫四郎二被 仰渡候趣承知仕候、依之奥判仕候以上

窪八幡神主

霧田内膳

18 元禄十五年九月 八幡宮二月始ノ卯霜月始卯餅重之御

祭礼座位記〔二四〕

〔包紙上書〕

「八幡宮二月始ノ卯霜

月始卯餅重之御祭礼

座位記

元禄拾五年午ノ九月九日

頼遍
」

〔祭礼之座位図、次頁に掲載〕

八幡宮二月始卯霜月始卯餅重之御祭礼之座二而候

御本社	三社	
-----	----	--

西

<p>皇御</p>	<p>官代官 九左衛門</p>	<p>形部 三明院 国之院 弥勒院 三國院 山伏 池之坊 淨龍坊 仙光院 惣坊 仲之坊 不動坊</p>	<p>順是 二廻ス</p>	<p>神子</p>	<p>おなへ かのがわ おいち やッ</p> <p>おなへ やツたへ孫四郎 御なかれ たかわ 二遣ス</p>	<p>孫四郎 大藏之助 二遣ス</p>	<p>孫四郎</p>	<p>上之坊 不動坊へ遣 上之坊蓋</p>	<p>大宮司</p>	<p>大宮司蓋 半之丞へ遣ス</p>	<p>順是 二廻ス</p>	<p>内藏之助 治部座 太左衛門 伊賀 勘左衛門 三左衛門 次兵衛 左衛門 伝兵衛 次左衛門</p>	<p>順是 二廻ス 白はた</p>	<p>權兵衛 周防へ遣ス 半之丞へ遣ス 順二廻ス</p>	<p>權兵衛 半之丞 平右衛門 与五右衛門 彌次右衛門 喜左衛門 長参文 三郎</p>	<p>御 二遣ス 二遣ス 二遣ス 二遣ス</p>	<p>二遣ス 二遣ス 二遣ス 二遣ス</p>	<p>甚 右衛門 西</p>	<p>周 固</p>	<p>次左衛門</p>
-----------	---------------------	---	-------------------	-----------	--	-----------------------------	------------	-------------------------------	------------	------------------------	-------------------	--	---------------------------	--	---	--	------------------------------------	------------------------	----------------	-------------

元禄拾五年
午ノ九月九日